出來能には源左衞門印を三ッ押申候、夫故三ッ印の釜大切なる物に候處、釜錆を落し候て改候へば、三ッ印あらはれ申候、そこにて釜屋某に見せ申候處、是は須磨の釜に相違無之旨、夫故予存申方へ秘藏にして所持に候、

〔茶話指月集上〕雲龍の釜はじめて出來候時、休○千利休氣に入りて、いままで圍爐裏にすへたる釜をのけ、五德置ながら自在に釣りて、茶湯たび〳〵出ス也、又一とせの夏、太閤○豐臣秀吉の御前に雲龍の釜御しかけありて、宗易に茶を點(タテ)よと仰らる、折しも御近習おほくて、十服ばかり點たるに、其湯始終さめざりけるとなん、

〔茶傳集十二〕一阿彌陀堂なりの釜二ッ、三齋公細川○持參入御覽候、口の廣き釜如何にも阿彌陀堂なり、少も惡敷所なしと被仰候、夫に付御噺有、利休に口の狹き阿彌陀堂形の釜爲見候へば、惡敷由に申す、此釜は目きゝ候而、茶の道不功者ノ者の好候釜と存候、大方瀨田掃部鑄させたるべきと申、如何にも掃部が鑄させ候釜也、如何して掃部望たると被申やと御尋候へば、利休申は、掃部は目は利候へども、茶の道は不鍛錬なり、此釜は此の如く形能候へども口廣過候、今少口ゑまり候はゞ猶能候半物をと申所にて、數寄道具になり申候、茶の湯の道は十分の物はウマキとて嫌ひ申候、一二ヶ所も頑所有物よく候、掃部鑄させ候釜は、頑所なく口も能程なり、十分ゑたるもの故、茶の湯ノ釜にはならずと申候、十分ゑたるものは、御道具と云て數寄には不用、代も高く仕事也、茶の湯道具は頑所ある故、代不仕候、されども人々の見立にて高くも仕候、たゞもいやと申も數寄道具にて候由、利休申たると仰なり、

〔花月草紙一〕遠州政一あその色紙釜てふものあり、山のふもとにかけひのけしきかいたるに、西行法師のとく〳〵とおつる岩まのこけゑみづくみほすまでもなきすまひかな、といふをつけたるが、あるやんごとなきひと、かの茶の道とて、ゑひてかゝることまねぶこそ心得ね、そのほど